流れをかえる大和川

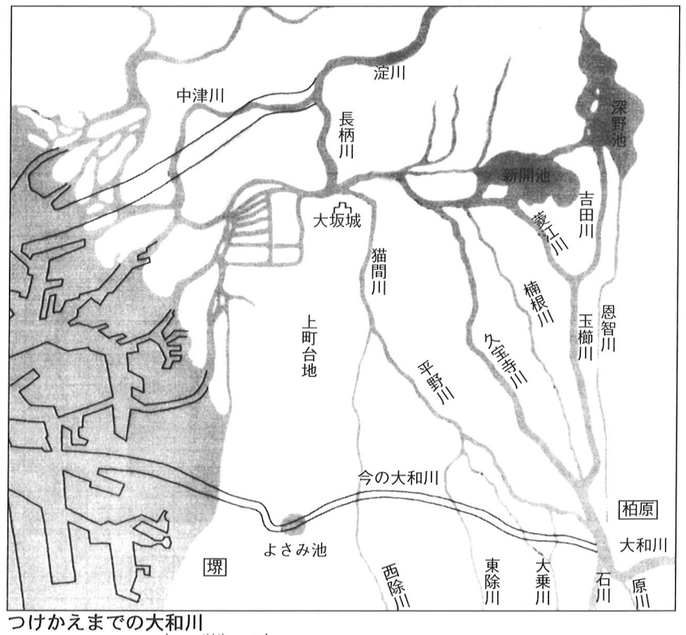
－つけかえ決定から300年－

2003年9月25日～12月7日

柏原市立歴史資料館

つけかえまでの大和川

柏原市から西へ向かって流れている大和川は、江戸時代の宝永元年（1704）につけかえられた人工の川です。つけかえまでの大和川は、久宝寺川（長瀬川）や玉櫛川（玉串川）など数本の流れに分かれて、北または北西に向かって流れ、淀川に合流していました。奈良盆地の水と中・南河内の水を集める大和川は、水とともにたくさんの土や砂を運んできます。その土や砂が低い土地をうめ立てることによって大阪平野がつくられてきました。そのおかげで、大阪平野にはたくさんの人が住むようになり、たくさんの田や畑が作られるようになりました。



つけかえまでの大和川

しかし、いつまでも大和川は土や砂を運び続けます。大和川の運んできた土や砂は川の底を浅くし、流れを緩やかにしてしまいます。そうなると、大雨が降って水がふえたときに洪水がおこりやすくなってしまいます。人々は堤防を高くしたり、川の底を掘り下げたりして、洪水がおこらないようにしましたが、やはり自然の力に勝つことはできません。やがて大和川は周辺の土地よりも川底が高くなった天井川となりました。天井川になると、洪水がおこったときの被害はますます大きくなります。そのため、大和川の近くに住んでいる人たちは、大和川をつけかえてほしいと願うようになり、江戸幕府につけかえを求めるようになりました。このように始まったつけかえを求める運動ですが、つけかえ工事が実現するのはそれから50年もたってからのことだったのです。

中甚兵衛

中甚兵衛は河内国今米村（今の東大阪市）の庄屋で、大和川のつけかえを求める運動に中心となって取り組みました。そして、その豊かな知識やだれにも負けない熱意が幕府に認められ、つけかえ工事のときには普請御用（手伝いの責任者）として活躍することになりました。その後も新田開発などに取り組みましたが、間もなく仕事をやめています。つけかえが決定したときはすでに65歳になっていましたが、92歳まで長生きしたそうです。

中甚兵衛肖像画

つけかえその後

大和川がつけかえられたため、河内平野の人たちは、洪水をあまり心配する必要がなくなりました。そして、深野池や新開池、それまで川が流れていた土地などにたくさんの田畑がつくられるようになりました。このような土地は新田とよばれ、つけかえ工事から5年後には、1,000ヘクタールもの面積になりました。新田では米もつくられましたが、綿の木が植えられ、この綿が河内木綿として全国的に有名になりました。このように、少しずつ生活が豊かになった人たちも多かったようです。

中甚兵衛着用の鹿革陣羽織

新しく大和川がつけられたところでは、270ヘクタールほどの土地が失われました。土地を失った人たちには代わりの土地が与えられましたが、住みなれた村から離れていたため土地をてばなしたり、村をはなれる人も少なくありませんでした。また、北への流れを新しい大和川にさまたげられるようになった西除川や東除川のまわりの土地では、水はけが悪くなり、洪水の被害もおきるようになりました。新しい大和川が運ぶ土や砂は、堺の港をうめてしまいました。たくさんの荷物を運んでいた剣先船も、新しい川を通るようになって時間がかかるようになったため、あまり利用されなくなっていきました。つけかえ工事に反対していた人たちの心配していたことが現実のものとなったのです。このように、つけかえ工事によって、河内平野では洪水の被害が少なくなり、たくさんの土地が田畑に生まれかわりましたが、苦労することになった人たちがいたこともわすれることはできません。

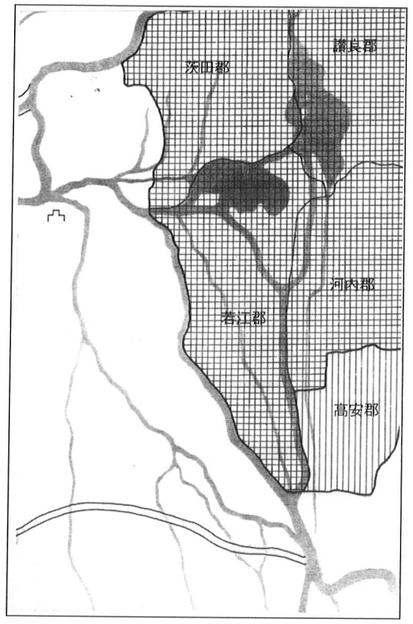
○このリーフレットは、2003年9月25日～12月7日に開催する秋季企画展「流れをかえる大和川」に伴って作製したものです。
○資料の借用・写真の掲載等に中好幸氏、小泉光氏、藤井寺市史編さん室のご協力をいただきました。

柏原市立歴史資料館
〒582-0015 大阪府柏原市高井田1598-1
TEL 0729-76-3430

つけかえを願った人たち

何度もくりかえされる洪水に苦しむ人たちは、350年ほど前に、今米村（今の東大阪市）の中甚兵衛を中心に、大和川の流れをかえるように江戸幕府に訴えるようになりました。その理由は、①洪水で家や田畑が砂に埋まってしまい、作物もとれずに生活にこまる。②洪水のないときでも水はけが悪い。③大和川をつけかえれば多くの農民が助かる。④川や池のあとに新しい土地ができるので、作物もふえて年貢もたくさんおさめられるようになる。⑤堤防をなおすために使っていたお金がいらなくなる。などというものでした。

つけかえを願っていたのは、河内・若江・讃良・茨田・高安郡など、もとの大和川の周辺にくらす人たちと考えられます。しかし、つけかえを認めない幕府の厳しい態度から、洪水がおこらないような工事を求める運動に変わっていきました。



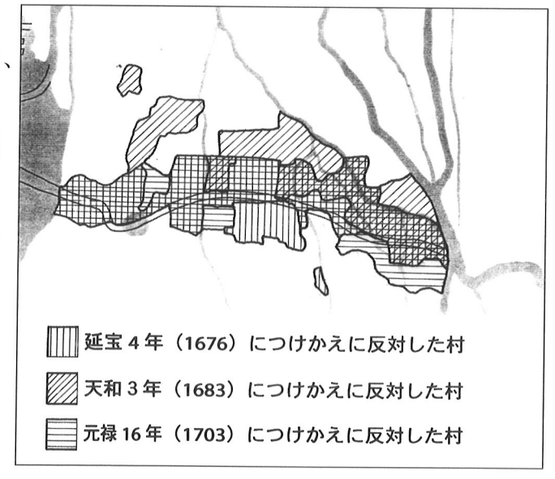
つけかえを願った人たち

つけかえに反対した人たち

しかし、新しい大和川がつくられる計画が出されると、その周辺の村に住む人たちを中心に、つけかえに反対する運動がおこりました。反対する人たちは、①先祖から受けついできた田畑が川の底になってしまう。②南から流れていた川が新しい大和川にさえぎられ、南側では洪水がおきやすくなる。③北側では水不足になる。④自然にさからって流れをかえるので堤防がこわれやすくなる。⑤道路がとぎれて不便になる。⑥今までのように船が通れなくなり、荷物を運ぶのにこまるし、船で働いていた人たちの仕事がなくなる。⑦堺の港が新しい大和川の運ぶ土や砂でうまってしまい、大きな船が出入りできなくなる。などと考えました。

延宝4年(1676)につけかえが検討されたときは、周辺の30の村が反対しました。天和3年（1683）には現在よりも北のほうを流れるつけかえが計画され、その計画地周辺の27の村が反対しました。元禄16年（1703）には、ほぼ現在の大和川のつけかえが決定されることになり、そのときには33の村が反対しています。

このように、つけかえが計画され、検討されるたびに、その計画地周辺にくらす人たちが、つけかえ反対に立ち上がるということが50年のあいだくりかえされました。



つけかえに反対した人たち

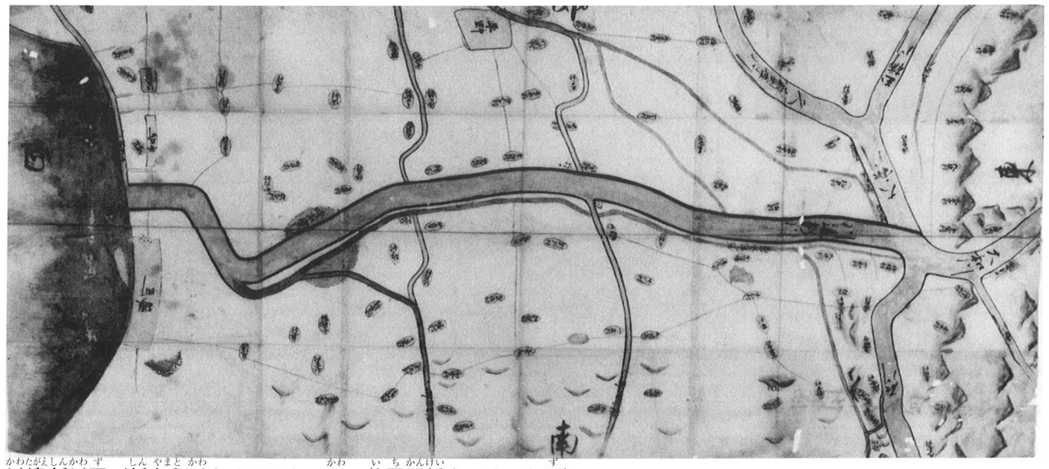
つけかえ決定

残された史料からみると、つけかえを求める運動が始まってからつけかえられるまでの50年のあいだに、幕府によるつけかえの検討が少なくとも5回行われています。そのたびに反対をする人たちの運動などもあって中止されていましたが、最後につけかえられることに決まったのが元禄16年（1703）のことで、今年2003年はつけかえが決定されてから300年ということになります。それでは、つけかえまでの歴史をもう少しくわしく見てみましょう。

何度かつけかえが検討された後、元和3年（1683）に幕府は真剣に大和川の洪水対策に取り組みます。このときにもつけかえが検討されたようですが、洪水対策工事などを得意としていた河村瑞賢が、淀川との合流点付近で水が流れやすくなるような工事をすれば、つけかえは必要ないという結論をだし、淀川の工事にとりかかります。しかし、河内での洪水はまったく減りませんでした。そこで、貞享4年（1687）のつけかえを求める訴えとなるのですが、幕府はつけかえの必要はないという厳しい態度で、訴えが実現しないどころかつけかえをあきらめる人が多くなっていきました。

その後も洪水はおさまらず、元禄13年（1700）には42の村で年貢がおさめられないというひどい状況となりました。そこで、幕府も元禄16年（1703）10月に、とうとうつけかえることを決定しました。多くの人々がつけかえをあきらめるようになって、ようやくつけかえが実現することになったのです。当然、新しい大和川の計画地周辺にくらす人たちは反対を訴えますが、一度決定したことを変えることはできず、宝永元年（1704）には工事が始められることになったのです。

工事は大和川と石川が合流するところ（柏原の築留）に堤防をつくり、堺へと西に流れる新しい川をつくるというものでした。平地には土をつんで堤防をつくり、瓜破や浅香の台地を掘りすすみ、川幅180メートル、長さ14.3キロメートルという大きな川です。川辺村（今の大阪市平野区）より東を江戸幕府、西を姫路・岸和田・三田・明石・高取・柏原藩などの大名が工事を行い、2月の後半にはじまった工事は、早くもその年の10月13日には完成しました。およそ7ヶ月半というスピード工事でした。この間に、毎日およそ13,000人の人たちが働き、71,503両のお金がかかったとされています。1両を20万円として計算すると、今のお金にして140億円ほどかかったことになります。


川違新川図（新大和川とそのほかの川の位置関係をしめした図）